

42. 商品作物と地場産業

「菜の花や、月は東に日は西に」という蕪村の句は、大阪平野北部の景色といわれているが、ナタネのほかにも色々な作物が作られ、加工業もあった。

ナタネ作り

ナタネは昭和初期につくった。その後、大阪ハクサイの種採りに代わった。ハクサイは収量が良かった。種屋が種をもってきた。

ナタネは値は良くないが、作業手順上植えた。

ナタネは冬作物。5～6月、刈って、地べたに並べて干す。引っ繰り返す。2～3日でカラカラに乾く。田で手もみにする。箕で風選、粒が細かいからタゴ、フゴ、袋などに入れてオウコで担ったり、リヤカーで運んだ（千里丘）

綿づくり

南別府の変電所の辺りは砂地で綿の木をよく作っていて、オクラのような花が咲いていた。女の人が広いひろい前掛けをして、綿摘みに行きはる。摘んだ綿は「綿打ちに出すねん」と聞いた（三島）

綿は加円の辺りでも作っていた（千里丘東）

綿くり

村の女の人に来てもろて、綿から糸に紡いでいた（三島）

別府の上川島（旧神崎川の中州）の辺りは砂地で、焼けてもて（乾燥してしまつて）（稲は作れず）ラッキョかワタしか作れなかった。大正頃まで、文久生まれのおばあさんが綿繰り、機織りをしていた（別府）

三島紡績ができた。

ビール麦を作る

収穫多いので流行った。5～6年作った。穂のイガが長うて付いたらカイトカイト（痒くて痒くて）。吹田のビール会社に持っていくと検査がある。その割りには値段が安うて（庄屋）

ハクサイの種を作る

昭和10年頃、ハクサイ（白菜）の採種をした。大阪長柄の大きな種屋「高田」「？」と契約。年による差が大きい。種にするには日によつて干して乾かさなあかん。その時期に旋風が吹いたり雹が降る。干してあるやつを叩かれると割れて1文にもならん（庄屋）

タマネギの種を作る

昭和 10~20 年の頃。茨木の峯岡種苗店と契約してタマネギの種採りをした。タマネギの種は 1 石 20 万円という。成金になれるという夢がふくらんで、成田の不動さんの辺りへ見学に行きました。なるほどええのが出来、柱を立てて棚をこしらえて 1 本 1 本くくる手間のかかる仕事だった。

タマネギの種は 1 年しかもたない。今年採った種は来年に蒔かないと、もう 1 年置くとだめ。ところが冷蔵庫が出来て、冬眠させると何年でももつようになり、値段が急落してしまった(庄屋)。

ナス・マクワウリ

戦前はウド・鳥飼ナス・マクワウリ

4~7月	7~10月	10月~
マクワウリ	鳥飼ナス	麦

マクワウリの蔓をまくりあげてナスを植える。ウリ・ナスは連作できない。1 度作ると 3~4 年の間は米を作って休ませる。戦前はウドは北野の市場に出した(一津屋)。

パセリ、サラダ菜

戦後は昭和 20 年代の糸へん、金へん景気の頃から、大阪中央市場に出荷する。

パセリ、サラダ菜、オクラ、コギリナス(小さいナス)、木の芽(一津屋)。

ヤナギゴオリ

1 軒だけヤナギゴオリを作っている家があった。他所で習ってきてやっていたようだ。原料も買ってきていた。昭和 20 年代(1945~54)には、ヤナギの技をソクッテ(束って=束ねて)置いてあった(千里丘東)。

柳の皮むき

江口や井高野は柳の木が多かった。柳行李の材料の柳の皮むきには、別府の女の人が農閑期に雇われていた。すっとうまいことむけると聞いた(別府)。

メリヤス業(一津屋)

地主の家が副業としてメリヤス織りをやっていた。ホンヤ(本屋=母屋)の前に小屋建てて、手のすいた女の人集めて織っていた。製品は馬力で運んでいた。戦争で糸の割当てがなくなって廃業したようだ(一津屋)。

メリヤス業は鳥飼上の地場産業だった。